

子どもから高齢者まで、全世代を災害に強くする！

全市をあげて地区防災計画に取り組む松山市では、子どもから高齢者まで全世代への防災教育に力を入れている。その中核を担うのが全地区で活躍する防災士だ。地区役員だけでなく、学校の教師であったり、様々な経歴を持つ防災士が地区と行政のつなぎの役割も果たしている。



地区の特徴は？

角田さん：松山市中島地区は愛媛県北西部の瀬戸内海にある忽那諸島全域かなり、それぞれの島は山地は頂上近くまで果樹園が広がる全国的にも有名な柑橘の名産地です。



南海トラフ地震で津波の被害が想定されている中島地区 17 地区全体で、合同の津波避難訓練を実施するなど防災の取り組みを行っています。コロナ禍で一気に集まる訓練が難しいなかでも、訓練内容を検討し、今年も 17 地区ごとの実情に沿った訓練を行うことができました。

島全体で平地が少なく、背後は急峻な山地である中島地区では、ほとんどの指定避難所は津波浸水域に立地しており、住民自ら安全と思われる場所を第一避難場所と決め、最初に集合する避難先としています。

芝さん：地区の課題としては高齢化とともに過疎化もあります。ただコミュニティはとてもしっかりしていて、コロナ前と変わらない人づきあいが続いていますし、角田さんのような熱心な方を中心に防災の取り組みが継続しているとても良い地域だと思います。

地区防災計画を策定したきっかけは？

角田さん：島には平野地が少なく、すぐ近くに山があり、安全な避難場所を確保する条件としてはとても厳しい。平成 30 年から松山市はすべての地区で地区防災計画に取り組んできましたが、この中島地区では、平成 30 年 7 月豪雨災害で若い方も含めお亡くなりになった方もあり、大変な被害を受けました。もう二度と繰り返してはならないという思いで、水害からみんなが安全に身を守るための取り組みを続けています。コロナの流行を理由に防災の取り組みを止めることはできないと思っており、何があろうと訓練はすると決めて、今年も実動の訓練を実施しました。



また、南海トラフ地震が起こると大きな津波が発生することが予想されているのですが、地震が起きたら沿岸部から山地へ逃げる津波避難の訓練ができていなかったため、地区防災計画の中で、津波対策として訓練内容を検討しました。豪雨災害にも、津波にも対応できるような訓練を重ねることを中心に考えています。

策定プロセスは？

角田さん：島ごとに、消防の協力を得て、毎年、全地区合同で行う総合防災訓練を中心においています。ここ 2 年は（コロナ禍で）みんな一緒に、ということができなかったのですが、日にちを 2 日に分け、また会場もそれぞれ 2 地区に分けて行いました。訓練の内容や、どうしたら三密を避けたいという訓練ができるかなど、各地区をまとめる防災会長（総代さん）に集ってもらい、検討を重ね、今年も津波避難訓練を実施することができました。



女性防火クラブに炊き出しをお願いするなど、訓練は消防に協力してもらい行っています。地区にいる防災士は全員関わってもらっています。各地区に 1 名～3 名の防災士がいますが、そのうち保育園や幼稚園も含めて、地元の小学校、中学校、高校で地区に 2 名ほど教員で防災士資格を取っている方がいます。災害が起きたら避難所運営を担ってもらう学校関係者の防災士資格の取得は今後も巻き込んで避難所運営マニュアルの整備を行ってまいります。

アドバイザーの先生との関わりは？

角田さん：磯打先生はとても熱心にかかわっていただいています。防災訓練の時や会合では、取り組みを具体化して行動につなげるようにとアドバイスをいただいていますし、急に物事を進めることは難しいので、共有するためのマニュアルの整備をやり、訓練で行動を具体化していく、ということです。

また、中島地区は高齢者も多いので、避難に際しての誘導などを丁寧に考えていきたいと思っています。具体的には 1 軒ごとの「避難カルテ」として、一時避難所までの避難経路や、家族にどんな支援力（資格や得意なことなど）、要配慮者がいるのかどうかなどの情報を書いて提出してもらっています。



アドバイザーの助言に従い、これを全地区でまとめている、地区の総代さんが管理しています。

芝さん：地区の会合や訓練にいつも同席していただき、丁寧なアドバイスをいただいているが、懇談会にも参加くださる等相談しやすい関係を作ってください。

計画策定において工夫した点は？

角田さん：今年目標やどんなことをやるのかということは総代会（防災会長の代表会議）で審議してもらい、それぞれの地区でやりやすいように決めておられます。しかし、地区の総代の任期は一年で交代します。総代さんにとってはなかなかこれまでの取り組みの流れがつかみにくいため、継続中の取り組みに沿った計画や、実際に何をどうやって行うのかといった細かいことは私が素案を作って総代会に提案をしています。

また、今でも訓練のお土産を準備していたのですが、昨年はコロナ禍を利用して、訓練に参加された方にはマスクをお配りしました。ちょうどマスクが少ない時期だったので、好評でした。

芝さん：松山市全域ではあるが、地域防災には大学や消防などたくさんの主体のかかわりがあります。大学生防災士が消火器の使い方やロープワークなどを指導すると、地域のおじいちゃん、おばあちゃんはとても喜んでくださっています。

行政の町内会や住民への支援は？

芝さん：人の結びつきが強い中島地区では、積極的な防災の取り組みの中心となっているのが各地区に 1 名～3 名の防災士の方です。松山市の事業として地区の推薦を受けた人や地元の教師などが防災士資格を取り活躍していますが、地域と防災士の皆さんや大学の先生などを結びつける役割を担っていると思っています。予算をつけることも大切ですが、地域と人を結び付けていくつなぎの役割が行政にはあると思います。



コロナ禍でなかなか外に出られない環境にはありましたが、コロナ禍だからこそ考えておかなければならない避難所のことを話題として、コロナ禍でも人が集まるための対策ということを、地区の方に集まってもらって話をしてもらいました。これは市内 41 地区の全体の会合の中で方針を決め、目標を定めて取り組みを行っています。地区の会議の後では参加者と行政と膝を突き合わせて懇談する機会が多くあり、同じところを目指している距離感が非常に近いと感じています。

計画の意義、効果は？

角田さん：これまでの検討で課題として挙げてきた地区の高齢者の避難支援を考える中で、具体的な取り組みができました。個人カルテの活用です。実際の避難訓練では、これまでの避難訓練に加えて、高齢者を搬送するのに折り畳みの担架やノーバンクタイヤのリヤカーを

使った訓練をおこないました。車いすでも参加してくれています。人が集まることで、地域の実情がとてよよくわかります。

芝さん：コロナ禍でも災害は待ってくれないので、昨年からコロナ禍で災害が起きたらどうするかについて対策を考えることにしました。大学や小中学校の先生方のご協力もいただきながら、地区防災計画に取り組むことで、コロナ禍での避難所のあり方を組織的に検討するきっかけとなりました。松山市では小学生からお年寄りまで防災リーダーを作るという全世代で防災教育に取り組んでいます。アドバイザーの助言もあって、その取り組みを防災まちづくり大賞（消防庁長官賞）とぼうさい甲子園（大学生部門ぼうさい大賞）で PR できました。全国の取り組みを知るきっかけにもなり、広報することの大切さを感じました。

計画作成後の活動は？

角田さん：地震津波、水害について、避難行動と避難生活のための訓練を今後も続けていきます。松山市の中では、すでに避難所運営マニュアルの策定を終えたところもあります。中島地区では今年度中に避難所運営マニュアルの検討ができたところもありますが、地区の多くは柑橘農家で、農作業が終わったタイミングをみて、春以降に具体的な検討に入りたいと思っています。

訓練も続けていきますが、資機材の整備が必要です。津波避難を考えると地区内には屋内施設の避難場所が少なく、多くは屋外の広場を想定しています。照明のない場所（一時避難所）も多くあり、非常用災害照明と非常用発電機をセットでの配備を進めています。また、感染症対策としての非接触型体温計も来年度にはすべての地区に配備が完了する予定です。

今後の課題は？

角田さん：1 軒ごとの避難カルテについても平成 30 年から取り組んでいます。今年も情報の更新はできていますが、高齢者の避難にあたっては見守り隊として、近隣の高齢者を見守ってくれる人を増やしていきたいと思っています。災害時には彼らが避難の誘導を行うこととなります。小さな地区ではすでにできていることですが、今後は、誰が誰を支援するのかといったことまで避難カルテに記載するなど、中島地区全 17 地区で内容を突き詰めていきたいです。

芝さん：この 2 年間のコロナ禍で地域の防災に対する熱量や人とのつながりが戻るのが心配ですが、できることを探して取り組みを継続していただきたいと思います。

取材協力：	松山市 防災・危機管理課
	市民防災担当課長 芝 大輔さん
	主査 内田 善朗さん
	中島地区 代表防災士 角田 義晴さん
取材日：	2022 年 3 月 16 日